大正8年、『白樺』創刊10周年に集まった同人たち。
前列左より柳宗悦、木村荘八、実篤、一人おいて犬養健。後列左より尾崎喜八、三人おいて椿貞雄、バーナード・リーチ、二人おいて木下利玄、岸田劉生、志賀直哉、長与善郎、高村光太郎。

をもって幕を閉じるまでの『白樺』に載った主な作品には次のようなものがありました。

★武者小路実篤　「『それから』について」「その妹」「或る青年の夢」「新しい生活に入る道」「幸福者」

★志賀直哉　「網走まで」「小僧の神様」「濁った頭」「城の崎にて」

★長与善郎　「項羽と劉邦」

★郡虎彦　「鉄輪」　★里見弴　「君と私と」

この他にも、有島武郎、有島生馬、木下利玄、千家元麿、柳宗悦、児島喜久雄等の優れた人々がペンをふるいました。

四 『白樺』と美術

『白樺』は、創刊以来、当時の日本では珍しかったセザンヌやゴッホの絵画、ロダンの彫刻など、西洋美術の紹介につとめました。

また、明治四三年七月の有島生馬と南薫造の滞欧作品展を始め、『白樺』主催の美術展を度々開きます。それらは日本近代美術の発展の上に力強い役割を果たしました。

こうした活動には、実篤の豊かな感受性と審美眼にもとづく主張が力を発揮しました。

五 『白樺』が果たした役割

『白樺』の人々は、演劇の公演や美術展覧会、実篤を初めとする同人たちの講演会などを全国各地で盛んに催し、共鳴の輪を広げました。そして、文学、美術の面だけでなく、日本の文化や思想の発展にも大きな影響を与えました。生命を大切にし、個性を生かそう、芸術の力を尊重しようという『白樺派』の考え方は、今日でこそ、当たり前のことのようになりましたが、大正時代には、新鮮なものとして受けとめられました。教育の世界でも『白樺』の精神を生かそうとする実践活動が広まりました。

「白樺」明治43年11月号は「ロダン号」として発刊。実篤の「ロダンと人生」という文章も載っている。

「白樺」が主催した美術展覧会は18回に及んだ。これはそのパンフレット。

発行日／平成12年3月31日初版　平成19年7月24日 4 版　発行／調布市武者小路実篤記念館　〒182-0003 東京都調布市若葉町1-8-30　TEL.03-3326-0648
企画・編集／調布市武者小路実篤記念館運営事業団　資料撮影／川崎 茂　レイアウト／デザイン室あとりえ
古紙配合率40%再生紙を使用しています

2

もっと知りたい 武者小路実篤

実篤と白樺派

大正時代の幕開けが近い明治43年4月、文芸雑誌『白樺』が誕生しました。まだ無名の若者だった実篤（25歳）志賀直哉（27歳）木下利玄（24歳）らがその担い手でしたが、理論面その他で指導的役割を果たしたのが実篤でした。

個性を伸ばし、自己を生かすことこそ大切と考える彼等は、『白樺派』と呼ばれ、その主張と作品は日本の近代文学の行く手に大きな影響を与えるようになります。

一 回覧雑誌の仲間たち

学習院の高等科で同級生だった実篤、志賀直哉、木下利玄、正親町公和は、明治四十年に各人の創作を持ちよって朗読と批評の会を開くようになり、十四日会と名付けました。会を重ねるうちに四人の回覧雑誌『暴矢』（後に『望野』と改名）が生まれ、彼等の文学への熱意は次第にたかまりました。

十四日会の仲間たち。
左から実篤、正親町公和、木下利玄、志賀直哉。（明治40年）

やがて、学習院の後輩の里見弴、園池公致、児島喜久雄らがこれにならって『麦』。同じく柳宗悦、郡虎彦が『桃園』という回覧雑誌を作ります。

これら三誌の同人たちが集まり、自分たちの仕事を世に問うために、準備に一年間かけて、明治四十三年四月に月刊文芸雑誌『白樺』を創刊しました。

二 個性を伸ばし自己を生かす道

『白樺』以前の日本では、醜いものも些細なこともあるがままに描く、いわゆる「自然主義」の文学が流行していました。

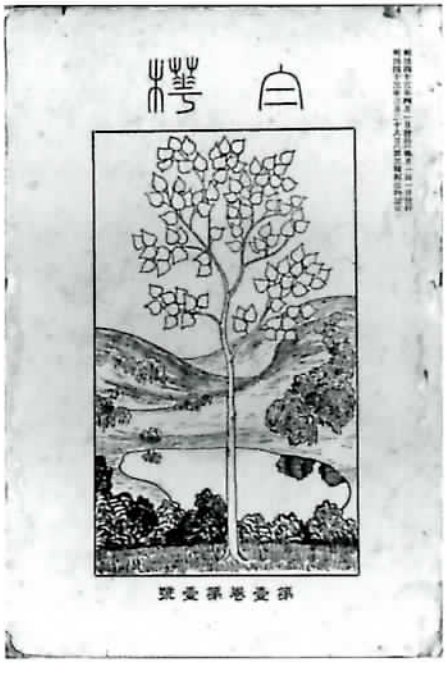
『白樺派』の人々は、けっして一つの主義主張でまとまっていたわけではなく、各人各様にのびのびと作品を発表しましたが、その中で実篤の「個性を生かすことによってのみ自分の存在の価値がある。」という考えが『白樺派』の意見の中心となって行きました。

また、実篤たちの作品に、深い人間愛や美と真理を追及する情熱が溢れているところから、人道主義、理想主義の『白樺派』と呼ばれるようになりました。

三 『白樺』で活躍した人々

創刊当時からの同人の他、途中から加わった人もいて、それぞれにすぐれた作品を『白樺』誌上に発表しました。

大正十二年、関東大震災のために一六〇号



『白樺』創刊号の表紙。
児島喜久雄が描いた白樺の木。